



「起承転結」という言葉が好きです。その理由については、機会ある毎にあちこちでお話をしています。最初を起と捉えて最後を結で結ぶ点に、何となく安定感や

満足感が感じられません。しかも結で一旦終わりが示されながら、その後がまだ続いていくような余韻や連続性を感じるところもお気に入りの点です。人生をこの四字熟語に例えたのは、明治の文豪、夏目漱石でした。彼は親友の正岡子規が肺病を患い、34歳で早逝したという短い生涯を評して、「短くとも起承転結があった」と述べたのです。人生は長くとも短くとも、その中には幾度かの曲がり角が経験されます。そうした場面に直面したとき、私たちは動揺する中で出来得る限りの熟考を重ね、次の道を選ぶという強い意志を働かせるのです。さすが文学者の言葉だけあって、思い浮かべる度に励まされ、また惚れ惚れさせられます。

比較対照として挙げるのが、吉田松陰が人生の例えに用いた「春夏秋冬」という言葉です。これは処刑日を翌日に控えて、弟子たちに最期の教えを記した遺書『留魂録』の中に使われている表現です。松陰先生は純粹さの反面、言葉の扱いがどうも上手でなかったようで、それがために自らを処刑台に乗せてしまったとも言えるようです。つまり後悔を背景に記したのが『留魂録』であり、実のところ弱っちまったよという個人的な心境の吐露だったように思います。その心境をつぶさに表わしたのが「春夏秋冬」という言葉ではないでしょうか。自然の枯れ往く姿を想起させる「春夏秋冬」は、往く先を見つめる強い眼差しに欠けるように思います。日本の将来を憂う若き弟子たちの心に、その言葉がどう響いたのかは大いに疑問を感じます。やはり人生は、「起承転結」に沿って進んでいきたいですね。

では起承転結の四つの構成要素のうち、どれが最も大切でしょうか。この質問には殆どの方が「転」とお答えになるでしょう。結を決めるためには、どのように転じるかが決め手となるからです。ところが、実際に転の場面を迎えた時、私たちは極めて保守的になるようです。転への入り口に戸惑い、起承に戻りたがるのです。例えば病気を例に挙げてください。病気は誰もが経験し、しかも転じるチャンスとなる人生の代表的な一大イベントです。では病気になったとき、私たちはどのように振る舞うでしょうか。もちろん誰も

健康を取り戻したいに決まっています。でも本音を言えば、実はもとに戻りたがっているのです。病気になる前の元気で畏れを知らず、鼻息荒く活躍していたついこの間までのあの頃に戻ろうともがくのです。このような考え方は、転じているとは言い難いですね。病気のように、一見するとマイナスに捉えられがちな出来事は、この視点ではどこまでも負の要素でしかなくなってしまい、決して結を見据えた前向きな姿勢にはつながらないように思います。

中国の古典『莊子』の徳充符篇第五の中に、とても印象的な逸話が著されています。自分が犯した罪ではないのに、足切りの刑に処せられてしまった者がいました。彼の姿を見た友人は、彼に問いかけます。「なぜ君は、自分はやっていないと訴えなかったのか。そうするべきだったのに…」。それに対する彼の返答は驚くべきものでした。「皆、同じことを言う。一人としてこの時期に、足があるべきではなかったと受け止める者がいない」。非現実的でばかげた話といえばそれまでですけど、私には転じるとはどういうことかを教えてくれる、具体例のように映ります。ソクラテスは古代ギリシア社会の法を尊重して、刑に服したと言います。しかし『莊子』のこの逸話は、悲壯感深い同情心を強要するようなソクラテスの話に比べると、私たちに勇気を与えてくれる前向きな内容に思えるのですが、いかがでしょうか。

転を辞書で引くと、「環（めぐ）る」の意である旨が記載されています。そして結も本来は「閉じ込める」の意で、終わりというよりも一旦区切りをつけるといった方が近いようです。この語源から考えると転結とは、別方向に舵を切って一つの結論を出して終わり、という単純な方向性ではないことに気づきます。数々の想いを巡らし、悩み葛藤し、結論は未だ見出せずにいるけれども、あるところで一旦筆を置く、というような意味かと思います。起承転結という言葉の響きに余韻を感じるのは、そういうことだと思うのです。終わりというよりも次の始まり、新たなる起を立ち上げる力、それが転結ではないでしょうか。この考え方は吉田松陰が『留魂録』の中で強調した、「冬は春の源である」という考え方にも通じるように思います。転結を繰り返し、次第に高みに上っていくための決め手となる人生の重要なポイント、そこに転が位置づけられると私は捉えています。